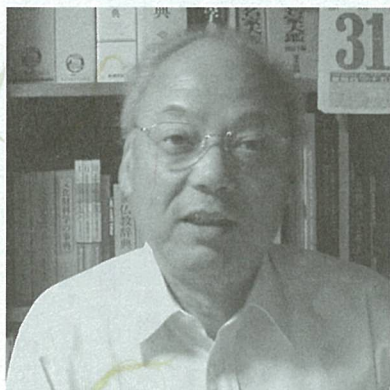


# 和紙

だより

## 越前和紙への提言



### ■ 岡岩太郎

明治27年(1894年)創業、「岡墨光堂」三代目主人。京都国立博物館内に修理工房を持ち、日本を代表する国宝や重要文化財の巻物、掛物、障壁画、襖絵、屏風などの文化財修理を永年手掛ける。大学や研究会議で日本の文化財修理に何が重要かを説いて回る一方、海外の技術者との交流も多く、工房では海外研修生も受け入れている。現在、選定保存技術者保持団体として、絵画、書蹟、典籍、古文書等の修理を担う技術者集団「国宝修理装潢師連盟」理事長。

### ■ 岡岩太郎さん 「伝統技術は総体で捉える努力を」

#### ● 科学が芽生えた時

京都は戦争で焼けなかつたので、戦後GHQは日本人の文化や民衆の心を知るために、文化財の調査を始めたと聞いています。その時から西洋の修理技術に関する情報が入ってくるようになりました。西洋の修理は、主に油絵、彫刻や「Paper Conservation」と呼ばれる紙本文化財修理があり、私達も欧米の修理技術を学び、彼ら外国人も日本の紙の修理技術を研究していったのです。昭和三〇年代に、ワシントンの国立国会図書館の修復ラボから「酸性紙の保存に適した紙」という論文が出ました。そこには、奈良の美栖紙・宇陀紙が文化財修理に適していることが科学的根拠に基づいて述べられていました。これらの紙はPHが8台の弱アルカリ性であるため、修理時にこれらの紙を使用することで、紙の劣化速度が遅くなるという内容です。昔から何百年も経験的にやってきた日本の紙の修理技術が素晴らしいものだということが、科学的に立証されたわけですから、その後、一九七〇年代の大阪万博の時、タイムカプセルの中に千年後、五千年後にも残る絵巻を入れたいという話があり、松下の研究所と共に長期間の保存に適した紙を研究しました。当初機械漉きの現代的な洋紙も案に出ましたが、やはり現在にも伝来している中世の絵巻・源氏物語絵巻や伴大納言絵巻に使用されていた紙と同じ材料ならば、確実に残せるのではないかという話から、これらの紙の成分を分析しました。手漉きの和紙とし、繊維も材料も決めることができたのですが、水が問



京都市中京区にある工房

題でした。水道を使っている紙漉工房では塩素が混じるし、山水を使用している所は鉄分が混じる。加えて、街中で漉くと排気ガスが混じり紙にホキシングを作ります。紙の作られる環境が大変重要だということが分かりました。この仕事は、私達の仕事の現場レベルに、科学の目が浸透してきた契機となりました。

#### ● 科学的な根拠のある伝統技術

文化財修理の工房は、現在では総合病院みたいなものです。文化財の古文書や紙に書かれた墨跡を例に挙げますと、いわゆる本紙の材質を分析します。繊維の種類、厚み、繊維長、密度、添加物、色、紙加工の方法などを子細に調べ、本紙と材質が同様の紙を漉きます。本紙の補修に用いるような少量の特殊な紙を、紙漉き工房に依頼し製作してもらうことが難しいので、現在では修理工房が自ら本紙の補修紙を漉くことが多いです。虫食いや欠失している箇所を補修をしています。

次は裏紙ですが修理の良し悪しは裏紙で決ま



修理作業

ります。通常軸物の裏打ちは三、四回しますが、軸物は巻き解きをしますので、ピンとしてかつ柔らかく、折れないようにしなければなりません。そこで、本紙と直接接着する肌裏紙は繊維が長く柔軟で強靱な楮紙を使用します。二枚目、三枚目の間に入る紙は、柔らかく巻き解きをするために、江戸時代中期から使われている、楮の中に白土や炭酸カルシウムの填料を入れた紙を使うようになりました。接着剤も併行して開発され、小麦粉を煮て作った糊を冷暗所で十年程保管した「古糊」が使われるようになったと言われています。糊を炊いた直後は一〇〇〜二〇〇万個であった分子量が、十年寝かすと四万個くらいに減少します。つまりドロドロした粘りのある糊からサラサラな糊に変わり、柔らかい接着が可能になります。そして、この糊は少量の水によって剥がすことができるので、五十年から百年で再修理を繰り返すという日本の文化財修理に合った糊と言えます。古糊を使い、酸化防止剤の役割をする美栖紙を裏打紙に使い、楮に填料を入れた柔らかい宇陀紙を総裏紙に使ったのが近代表具の完成といわれ、道具も含めて「京表具」というブランドになりました。古糊の製法はそれこそ一子相伝の秘伝で、京都でも一流の表具屋さんだけが使っていました。今では公開されています。伝統技術はこのような長い経験と工夫

から生き残ってきたものだから、科学的な裏付けが必ずあるのです。紙漉きでもそうでしょうが、今日、伝統技術の中の材料の、この接着剤が高分子の科学糊にかわり、本物の美洒紙・宇陀紙が使われなくなりつつあります。紙の生産も少なくなり、技術自体が絶えようとしています。修復の世界で今、一番困っているのがこの辺りのことです。

●修理技術を総体で捉える

裝潢を支える材料や道具の制作者は年々高齢化し、後継者不足が深刻な問題となっています。技術革新と価格競争のために、伝統的な材料を作らなくなっているからです。問屋、流通も変化しています。このような良い紙がないと私達の仕事は成り立ちません。私が理事長をやっている「国宝修理裝潢師連盟」は、日本の文化を継承するために必要な技術、絵画、書跡、等の分野で修理をする技術者が、全国に十工房、百三十人登録されています。文化財を支えている環境を総体的に捉え、整えることが重要なことです。



修理工房での作業風景

文化財のお医者さんとして資格制度、技術者検定を設けています。日本文化を見つめ直す基本がそこにあると思います。

■(株)東京松屋 東京都東上野  
「国内最大の襖紙シヨールーム」リニューアルオープン

商品企画室の河野綾子さん



(株)東京松屋は、元禄三年(二六九〇年)創業より三百年余り続く和紙問屋。戦後、商いを襖紙、壁紙、障子紙、屏風などの内装和紙に特化し、首都圏を中心にインテリア和紙の需要に对应してきた。二〇〇七年五月、それまで社屋のあつた場所に、十二階建て新築ビルをオープンさせた。一階〜四階は、インテリア和紙のシヨールームスペース、五階〜十二階は四十戸の賃貸住宅となっている。和紙の良さを知ってもらうために、賃貸住宅の内装は和紙を使い、まさに生きたシヨールームとなっている。シヨールームの延べ床面積は、一〇〇〇㎡、従業員数二十五人、年商十億。商品企画室の河野綾子さんに、シヨールームリニューアルにける戦略を伺う。

●東京松屋のシボル「江戸からかみ」

東京松屋と言えば「江戸からかみ」が看板である。平成三年、社長の伴充弘氏自ら、伝統ある江戸からかみの技術保存、継承、普及、新たな開発を目的に「江戸からかみ振興会」を発足させた。翌、平成四年には東京都の伝統工芸品指定を受け、平成十年には任意団体から法人格を有する「江戸からかみ協同組合」に組織を改め、十一年に経済産業省の「伝統的工芸品」

指定を受けた。現在工房十二軒、版元二社、職方さん二〇名を束ね、日本のよき伝統を現代生活に取り入れる努力を続けている。

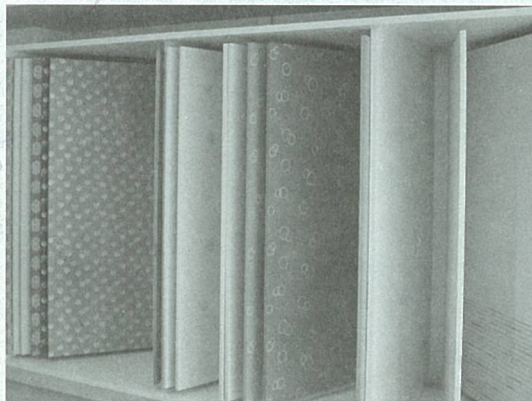
江戸からかみは、江戸が開かれた時代に重要な高まりに依り、京都から職人が移り住み始められたのを起源とするが、その特徴は技法の種類が多いことだ。木版は勿論、渋紙に模様を切り抜いて作る「捺染手摺り」、フリーハンドで金、銀、色砂などを撒いて模様を作る「砂子手時ぎ」、刷毛で線を引く「引き染め」等の技法は、時代と共に特化された工房を現出させた。京からかみが木版手摺り中心の公家好み・武家好みと言われるのに対し、江戸からかみは町人好みとされ、自由闊達で粋な江戸つ子の文化を色濃く表す。この人気柄は、大きな壁面や襖にも連続模様で用いることのできる「蔦」「萩」、ちよつととぼけたムードもある「山桐」模様などは大変モダンだ。当社が十六年前、制作した江戸からかみの集大成とも言える『彩』見本帳に収録している模様は全部で百種類。定番手加工商品は買い取りで、常時在庫している。

●和紙の内装空間をアピール

シヨールーム二階は、和紙・和紙ステーションナリー等の小物販売、二〜三階は「江戸からか

み」「手漉き和紙」の襖紙展示パネル六〇〇種類をはじめ、壁紙、障子紙、美術かざり金具、戸引手、襖建具、屏風、衝立などを展示。最近漸く、専門や一般のお客にも江戸からかみが知られ、ここで実際貼ったところを見学できることで、洋風の空間にも合うということが理解されるようになってきた。専門家でも、以前は手漉き和紙の内装材というと、素朴な感じのいわゆる和紙らしい紙をイメージしたようだが、ここへ来てモダン住宅にも使えるプレーン

襖展示パネル



な和紙もあれば、照明や光線の具合で表情を変える和紙にも出会い、認識を新たにしようだ。一見派手な蔦の連続模様も構図の妙が活きるインテリアのアクセントになる。天井に貼られた萩模様もワンランク上の高級感をも出し出す。マンションにも合うニュー障子やニュー屏風の提案品もある。上層階の住人も和紙の内装の独特な心地良さに目覚めたそう。その他、漆器、木工品など和のしつらえを提案する小物を販売している。四階には、空中庭園を有するセミナー室が二部屋設置され、研究

連続模様にも使用できる蔦模様



会、セミナー、教室に利用される。現在の所、一般向けの和紙文化教室が中心だが、今後新規需要開拓のためにも、建築士やインテリアデザイナーなどプロ向けの和紙施工セミナーなども企画準備中だ。

### ●今後の戦略

二〇〇五年、同社は「日本橋三越本店五階J・スピリッツ」内に、東京松屋コーナーを展開し、江戸からかみ、手漉き和紙、襖紙・屏風・照明、和紙小物の販売を行っている。東京松屋というブランドを知ってもらうための、いわば「顔作り」だ。

また、設計営業にも力を入れている。歴史的建造物の新築、修復に伴う和紙内装材料調達と工事との込みで受注する仕事も増えてきた。キーマンは設計士やゼネコンなどで、特注対応もできることをアピールし、見本帳や和紙カットサンプルなどは常時送っている。「江戸からかみは徐々に売上も上がってきましたが、一方で手漉き和紙以外の紙の受注もとりこぼしてはられない所が難しいところ。商品企画といつても、設計もやりますし、表具師さんとの施工打合せや職人と一緒に和紙のデザインをしたり、何でもやっていかないといけません」と河野さんは語ってくれた。



和のしつらえ提案

## 取組紹介

### ■福井型ビジネスモデルの開発 「おいしいキッチンプロジェクト」

総合プロデューサーの  
二口誠一郎さん



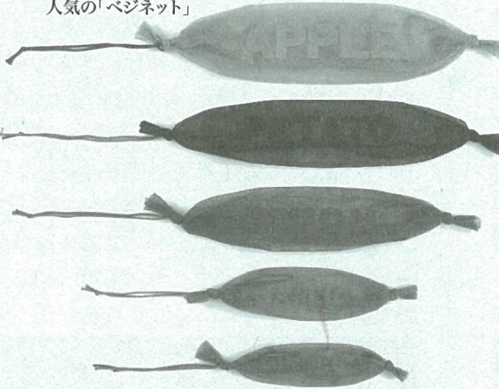
<http://www.o-kitchen.com>

平成十四年四月、福井市長の呼びかけで、地元の若手経済人を中心に同県の新産業創造のために「地域産業創造会議」という会が立ち上がった。この会の初仕事は、県内産業の特性を調査・分析によつて見据えること。結果、次のような結論に至った。福井県には、メガネ、繊維、金属食器など確かなものづくりの土壌がありながら、その技術を活かした最終商品が少ない、横断型企業連携が弱いため単一素材の下請け型産業が多く儲けが少ない、できた商品を生る流通・販売力がない、という地方の地場産業にはどれも当てはまるような問題点がこの会で共有されたのだ。これらの問題意識を元に、綿密なプランを積み重ね開発したのが、平成十七年に発表された「おいしいキッチン」の商品群である。同ブランドは、福井型ビジネスモデルとして脚光を浴び、売上も今年月商一〇〇〇万円を超え、順調に伸びている。東京の大手広告代理店でマーケティングや商品開発を担当の後、地元福井にUターンしたという総合プロデューサー、(株)リンクコーポレーションの二口誠一郎さんに成功の秘訣を伺った。

### ●売れる仕組みへの挑戦

「おいしいキッチン」の商品は、雑貨好きの触手をそそる、ちよつとオシャレでユニークなキッチン回り商品だ。マーケティングの後、コンセプト作りを開始。それに基づいて、デザインプロデューサー紫牟田信子氏は、プロジェクト参加の意向を示した福井県下のスプリング、レース、刃物、高機能繊維、桐の各素材を扱う五つの企業と東京のデザイナーをマッチングさせた。各企業の開発コンソーシアムへの参加金は、二百万円(内百万は市から補助)だった。小さな中小企業で新商品開発をするだけでも、すぐに一〇〇〇万円を超えてしまうことから思え

吊して野菜・果物を取納する  
人気の「ベジネット」



ば、破格の開発費と言える。デザイナーは、東京の若手デザイナーにこだわら、いわゆる有名大御所デザイナーは起用していない。実際のデザインディレクションは、プロダクトデザイナーの酒井俊彦氏が携わった。売れ筋の常備野菜をカラフルなネットに入れてぶら下げるといふ「ベジネット」というレース商品のデザイナーは、「Goma」という雑貨好きの三人組ユニットで、雑誌のスタイリスト出身だ。最初の開発

デザイナーは安めに設定した代わりに、5%のロイヤリティ契約にした。デザイナーが作品を作るのではなく、本気で売れるデザインを提案して欲しかったからだ。

情報発信と販路開拓は、リンクコーポレーションが受け持つ。全国のインテリア・雑貨ショップ、家具店、デパート、ハンズなどの都市型DIYショップを中心に営業をかけ、現在国内二八〇店舗で販売するまでにこぎ着けた。二〇〇六年度ADC賞を受賞した赤い口のロゴマークは、生活提案型商品群を訴求するのに、コーナー展開がしやすく、現場で受け入れられやすかったという。また「おいしいキッチンはじめました」という本も出版し、ユーザーに意図するライフスタイルや開発物語を伝えている。

### ●今年、和紙アイテム加わる

平成十九年には最初の参加企業五社に加え、プラスチック、板紙、システムキッチン、そして和紙の企業四社が加わり、アイテムが又広がった。和紙は勿論越前和紙。壁紙やインテリア建材などを手掛ける問屋(株)丸和が参加に名乗りをあげた。和紙といえば、今まで便せん、葉書等の伝統的なアイテムが多く、洋風のキッチンアイテムとしてどのようなものがあるか興味津々であったが、デザイナーの



平成16年発表の和紙のおすそ分け袋

雑貨スタイリスト伊藤まさこさんは、プレリーな和紙の「おすそ分けの袋」を提案してきた。お世話になった方へのご挨拶やホームパーティーに、手作りケーキやお取り寄せのおすそ分けを持って行きたい時など、この和紙袋に入れれば気の利いた演出となる。和紙シリーズには他に、和紙でできているが故に高級感のある紙コップ、お弁当の仕切り、プレゼントを入れるのによい箱などもある。

●モチベーションが上がる

地場産業は、あまり市場の前面に出ることなく、ものづくりの下支えというイメージが強かったが、この「おいしいキッチン」プロジェクトの成功は、地元企業経営者の跡継ぎや従業員のやる気を引き上げたという。多くの雑誌で紹介され、マスコミにも取り上げられた。実家の会社の商品が雑誌に載っている。友達にも「ほらこれうちで作っているんだよ」と大手を振って言える。

「モチベーションが上がったことが地域の産業を元気にするのに一番嬉しい効果だったかもしれない。今後は、少しエリアを広げて新潟県等の企業も取り込んで行くつもりです。日本のブランドとして海外市場にも挑戦したいですね」と二口さんは抱負を語ってくれた。

ライフスタイルや開発物語を収録した本



■ペーパーアートの祭典「ペパラッチ」開催  
／オーストラリア・アルバニー



四月六日十五日、オーストラリア・アルバニーでペーパーアートの祭典「ペパラッチ」が開催された。オーストラリア南部のアルバニーは、木材チップ（ブルーガム）の一大輸出港。当地のこの産業を盛り上げようと、紙にまつわるイベントとして企画され、今年が第二回目。「ペパラッチ」は「ペパラッチ」をもじったもので、紙とアートにまつわるインスピレーションあふれる作品展示やイベントが行われた。二九人の西オーストラリアの気鋭の現代アーティストが平面や立体のペーパー作品に挑戦した。ヨーク通り、公園、図書館、ショップウィンドー、旗立など様々な場所を利用した展示会場では、二六の作品が展示され市民にも好評を博した。日本から招待作家として伊部京子氏が招かれ、作品展示や和紙を通して日本文化を紹介する講演やワークショップが行われた。

情報欄

●イベント情報

■和紙の里の七夕まつり

時：2007年8月4日(土)～7日(火)  
場所：和紙の里通り(越前市新在家町)  
カワソサン祭り、七夕まつり、写真コンテストなど

■丹南産業フェア2007

時：9月15日(土)～17日(祝・月)  
場所：サンドーム福井  
和紙製品即売、体験コーナー

●カワソサン

越前五箇地区では、昔からカワソ(河濯)サンという子供を中心とした行事があります。大滝地区は紙漉きの工房が多く、オリドと呼ばれる川水を利用した洗いがたくさんありますが、川の神様に感謝するために平らで大きな石の上に、野菜や紙で作った動物や人形を供え、ろうそくで飾り付けをする祭りがありました。この祭りは昭和55年から地元の人によって復活されました。子供達は趣向を凝らして飾り付けられた人形を見て回り、ろうそくの火で線香花火などを付け遊び、最後は人形を川に流して祭りは終わります。河濯の神はもともとは水の神で女神だとされ、人形流しは「六月祓」といって罪や汚れをかわへながす行事だと言われています。ろうそくの火が和紙人形を照らし、水面にやさしく浮かぶ和紙の里の夏の風物詩です。

▼カワソサン祭の風景▶



編集後記

福井県は、大手新聞系の雑誌の調査によると、持ち家率も高く日本一住みやすい所。少子化率も全国一低く、暮らしやすい所だそうです。今号でご紹介したような福井型の成功事例が沢山出てくれば、元気がプラスされますね。(よ)